

2023年度奨学生総評

小島なお

●清水 将也さん

夜明けには天皇陛下になる君を
呼び捨てにした最後のハイウエイ

窓ガラスのうつろな瞳の僕たちを

都市の夜景が希釈する、零時

都市を生きるものたちの孤独のたわいもなき、取るに足らない感情ををきら
きらしい皮肉で掬う作者。個を捨てて天皇という象徴になる君。もうすぐ失われ
る名前を最後に呼び捨てにする親愛の夜。

●中矢 溫さん

てふてふに乳房与えて姉妹

鰯雲ここも誰かの歌枕

定型や切れ字など俳句の土壤を生かしつつ、現代の口語文体の感覚をすべり
こませてゆくドライブ感の小気味よさ。「歌枕」はかつて誰かが叙情した土地。
場所を示す「ここも」と無形に流れゆく鰯雲が呼び合います。

●高田 照輔さん

「うそつき」「

「そつき」 の部分だけ響く

銃撃戦が繰り広げられ
味噌汁があつたまる

日常を担保する非日常の気配を敏感に嗅ぎ取ることで、かえって日常の強度が増してゆくような読後感。聞こえなかつたことで失われた「う」にこそ、取りこぼしてはいけなかつた声の、心のくぐもりがあつたはず。

●白野 実悠さん

たりない、と花弁みたいに笑う
君がふつとくずした体育座り

雨つすね 雨くらい降る星にいて
あなたは雨をじつと見ている

みずみずしい発話の導入が、つねに現在進行形である未然の感覚を伝えてい
ます。「たりない、」ものを挙げていけば、行き着くところは「すべて」だろう。
花びらがみずからを諦めて散るように、君が体育座りをほどいてゆく。

●奥村 俊哉さん

焼釜にナン貼りつける開戦日

バファリンの表にBが彫られ冬

そこにあるものがあるがままに言葉にしようとした途端、逃げてゆくもの。そ
の尾を掴もうとする連作に感じられました。開戦のその日にも世界各地で日常
は流れ作業として稼働している。焼釜の火と戦火と。

●杉原 健吾さん

僕の名を
テプラも覚え始めてて
春は眩しい密室である

僕は人より小舟寄りな気がしてて
帆を揚げるようセーターを干す

この世に存在する必然の寂しさをみずからあかるくくるむような向日性のある詩情です。くりかえし印字することでテープラに覚えさせた自分の名前。むせるような春の密室のなかで、自分が自分でしかないことの切なさに溺れてゆく。

● 篠遠 早紀さん

恐竜の化石見上げる旅始

活火山背に撮るスキー板掲げ

太古からめぐりつづける季節。何度でも飽きずに私たちはそれを祝福しつづけて、新鮮に叙情してきたことを思いださせてくれる一連。「旅始」は新年になつてはじめての旅。この旅はもう何億年目になるのだろう。

● 渡邊 早紀さん

あこがれの回転木馬が止まる先
夢の中でも塾が建つてゐる

白蠟のような手首が夕焼けに
焦がされ熱くなるよ晚秋

愛することや信じることの途方もなさ。見めぐりにあふれる感情の行方から目を逸らさないしたたかさ。白く柔らかな手首は、誰かに守られてきた手首でもあります。夕焼けに溶けて、いざれ自分を灯心とすることができたなら。

● 塩田 きよらさん

脊椎の窪みの鋭さをなぞる

きみは死んだら良い薔薇になる

別撮りの卒業写真の背景に
爆弾みたく落とす青空

生きている世界の暴力性に晒されながら、いまここに果敢に踏みとどまろうとするたくましい一連です。脊椎のひとつひとつが繋ぎ合わされてできあがつているきみ。死によつて解体されたきみの無脊椎の美しさを夢想してみる。

●郡司 和斗さん

向かいあう遠景を
だっこひもに頼つて
くすんでいく
鳥の声がきこえた

私は布団を売るために生まれ
実際たくさん野菜を売り
よく壁をながめていた

意味のおもしろさと無意味のおもしろさ。どちらも信用しながら、いずれも疑う作者の挑戦的な詩作。親と子の視界は交わらない。だっこひもだけを親と子のよすがとして、他者になつてゆく刻一刻を渡つてゆく鳥。

●渡邊 美愛さん

きみのその、
浜辺みたいなそばかすが
くしゃつとゆがむ

青空

だつた

海につづく坂

を

駆け下り 夏を抱く

すべての樹々が眼に痛かつた

感情は一過性のものである。けれど、そばかすは浜辺みたいで、夏の樹々は目に沁みる。目に見えるものすべてが感情の依り代として動きだす。ゆがんだ浜辺の照りかえしがきみを特別なひとにしています。

●松下 誠一さん

間違えているのが僕でユーカリを
たべて寝ているのがコアラです

寓話はおしまいに向けて菜の花を
過剰に描写する

しかたなく

悲劇的な喜劇。どうしようもない日々も俯瞰して眺めてみれば説話のようなほほえしさが滲むよう。寓話はあらかじめ決まつた結末へ向けて進むのみ。ゆえに緻密に描写された菜の花を解釈してはいけないのです。

●藤野 日向子さん

風光る 孵化しなかった方が僕

手の甲にテスターの跡 秋夕焼け

多くのひとは「じゃない方」の人生を生きている。ときに破れたり、祈つたりしながら受け入れてゆく。「孵化しなかった」けれど、化粧品は買わなかつたけれど。光る風のなかで、秋の夕焼けのなかでいまを愛おしむことができる。

● 小笠原 風花さん

内定は花野にあるつて聞きました

さくらんぼ 私が兄の世界線

孤独やさみしさがやすらぎになることがある。それは夢とも似ていて、何をしたって誰にも干渉されない自在があざやかに謳歌されている印象です。兄の世界線において搖るぎない私。さくらんぼの二粒のような兄妹の縁。